

ブレヒトとファレンティーン

酒井 謙 一

Brecht and Valentin

By

Kenichi SAKAI

Department of Applied Biology

(平成 15 年 8 月 27 日受理)

I

カール・ファレンティーン (Karl Valentin, 1882-1948) は 20 世紀前半を代表するミュンヘンの寄席芸人である。相方リーズル・カールシュタット (Liesl Karlstadt, 1892-1960) との道化芝居は、チャップリンに比肩するものと称讃された。

当時のファレンティーンの人気と観客の熱狂ぶりを知るために、フォイヒトヴァンガー (Lion Feuchtwanger, 1884-1958) の『成功』 (Erfolg, 1930)¹ を見てみよう。これは、サブタイトルが「ある地方の 3 年間の歴史」となっているように、第 1 次大戦後の革命騒ぎのあと、ヒトラーたちが勢力を伸ばしていく 1921 年から 1924 年のミュンヘンを中心としたバイエルン地方の歴史を、2000 年から振り返って見ているという設定で描いた小説である。あらすじはここでは紹介しないが、名前は変えてあるが、ヒトラーも、ブレヒトも、フォイヒトヴァンガー自身も登場する小説で、人々の暮らしに関するいろいろなデータもところどころに挿入されていて、当時の世相を活写した作品である。そこでファレンティーンの舞台も紹介されている。2 巻 15 章である。

ただし、ここでは、喜劇俳優の名前はバルタザール・ヒーアルに変えてあるが、ヒーアルがファレンティーンであることは見誤りようがな

い。演目が、ファレンティーンの、“Tingeltangel” というタイトルでもよく知られる、『オーケストラリハーサル』 (Orchesterprobe) と『大火』 (Großfeuer) といういずれも代表作であるし、また、胃が悪いので出演後の楽屋でビールの温め方に文句を言う神経質そうな姿が描かれているが、これもファレンティーンにまつわる有名な逸話だからである。

場所はミュンヘン中央駅近くの民衆的な演芸場、ミネルヴァホール、恋人の冤罪を晴らそうと懸命に動いているヨハンナ・クラインという女性が、半ば世間に対する意地から決意した恋人との獄中結婚を翌日に控えて、少し気分を変えるために、弁護士たちと、久しぶりに登場したヒーアルの評判の舞台を見にきた場面である。

聴衆はたいてい小市民、中産階級の人たちだった。1 リットルまるまるのビールを飲む財産がなかったので、4 分の 3 リットル年金生活者、4 分の 3 リットル金利生活者と呼ばれていた。地味な、愛国的で神話的な Fresco 画で飾られたホールのどぎつい光の中に座って、葉巻やパイプを吹かして、休憩時には金管楽器オーケストラの大きな演奏の音に耳を傾けていた。上演中は食事をしてきた。まる 1 週間切り詰めてきた分を一晩で埋め合わせなきゃならなかった。……ホールには煙草の煙、静かでゆったりとした物音、ビールと汗と人い

きれが充満していた。年取った市民たちは気持ちよく座り、恋人同士はどっかりと、この上なく満足して腰をおろしていた。高級官僚やそれ以外の有力者たちも、小市民たちの間にたくさん混じっていた。というのも、バルタザール・ヒーアルは、頑固にも民衆的な娯楽場にしか出演しなかったからだ。 (Erfolg. 212)

舞台にいよいよヒーアルが登場する。最初は、『オーケストラリハーサル』である。擦り切れた緞帳の前に座る何人かのオーケストラのメンバーの中に、安っぽい化粧に、真っ赤な頬紅をつけて、えらく白くぼかかいかい不細工な鼻をした、とびきりやせて、背が高く、悲しげなヒーアルが、みじめな椅子にハエみたいに張り付いて座っている。現実のファレンティーンもそうだが、この姿かたちが先ず笑いを誘う。

彼はバイオリン奏者なのだが、今日は来られない同僚の代わりに打楽器の方もやることになっている。2つの楽器、特に弦楽器と打楽器を一度にこなすなんてことは所詮無理なことで、当然大混乱になる。さらに、ヒーアルの相方の、リーズル・カールシュタットに当たる女性が男性に扮して演ずる指揮者のネクタイがずれているのをヒーアルがこっそり教えようとするが、一向に分かってもらえない。遂に演奏を中断すると、叱りとばされる。こうして、ますます混乱に拍車がかかっていく。

互いの意思が疎通するなんて、全然見込みがなかった。きわめて単純なことがすべてすぐに問題をはらんだものになった。言葉では不十分。おまけに、2つの楽器を演奏しろとくる。手も足りない、足も足りない、言葉も足りなかった。難しい世の中だ。せいぜい、悲しい気分で忙しそうに、たぶん、かたくなに黙りこくって、そこに座っていることしかできなかった。だって、自分は間違っていないと思っていたんだから。でも、他の人たちにはそれが通じなかったし、耳を傾けようともしてくれなかった。 (Erfolg. 214)

弦楽器と打楽器の2つの演奏を兼ねような

んで所詮無理、そんな不条理なことを企て、そこから連鎖的に引き起こされる互いのコミュニケーション不能と取捨不可能などたばた騒ぎ、そして、その間に垣間見えてくる人間の悲しい性を、とてつもなくやせていて、背が高いという姿かたちからしてグロテスクな男が演じる、これがヒーアル（ファレンティーン）の道化芝居のおかしさなのである。

火事を消すために駆けつけてきた消防隊なのに、ファレンティーンたち隊員は、一向に目の前の火事を消さずに、関係ない話を繰り広げ、結局、家が焼け落ちる、次の演目の「大火」もこの不条理さ加減がおかしいのである。

こういう舞台を見て、「観客は、大声をあげて、げらげらと笑い転げて、椅子から落ち、笑いすぎで苦しそうに口をばくばくさせながら、ビールや料理を飲み込んでいた」 (Erfolg. 215)。観客は個別の心配事など忘れ、一体となって、舞台上の道化役者の動きを追いながら、そのどうしようもないどじさ加減に日頃の憂さを晴らしていたのである。

以上紹介したフォイヒトヴァンガーの記述からも分かるように、当時のミュンヘン子は、そのどじさ加減の中にグロテスクで不条理な社会の実相がちらっと覗くファレンティーン的舞台に、本当に夢中だったのである。

II

では、アウクスブルクに生まれ、ミュンヘン大学に進んだブレヒト (Bertolt Brecht. 1898-1956) の場合はどうだったろう。1920年3月半ばに、ベルリンで知り合ったドーラ・マンハイム (Dora Mannheim) に宛てて出した手紙を見てみよう。

お昼に、もっと気温が上がると、15時間走ってきた列車はもう我慢できずに、ぼくをミュンヘン駅で吐き出しました。トランクを抱え、70本あまりのひげを顔に生やし、顔も洗ってないのに、真昼の太陽のもとにね。でも、ぼくは、とても機嫌よく、非常にゆっくりと下宿までよろよろと歩いて帰りました。そのあと、夜中の11時まで、キャバレーでファレンティーンを見て、

笑い転げていました。(BFA. 28. 106)²

カップ一揆が勃発したために、演劇のコネを求めて初めて行っていたベルリンからあわてて逃げ帰ってきたブレヒトが、15時間の列車の旅のあと、すぐに出かけたのがファレンティーンの舞台なのである。資料的裏付けがあるのでは、これが初めてファレンティーンに触れている箇所であるが、手紙の文面からして、おそらく1917年10月にミュンヘン大学に入ったあたりからはかなり頻繁に出かけていたのだろう。事実、ベルンハルト・ライヒ (Bernhard Reich) はこう述べている。

あるとき、彼 (ブレヒト) は、ぼくを『音楽リハーサル』『オーケストラリハーサル』を見に誘った。…………それはものすごくおもしろくて、ブレヒトは大声を張り上げて笑っていた。…………カール・ファレンティーンが出演するたびごとに、ブレヒトは見に行っていた。時には座らずに、ホールの側壁にもたれて立って見ていた。(Reich. 268)³

ライヒが「演劇嫌い」(Reich. 268)と呼んでいるように、演劇を見に行くのは必ずしも好きではなかったブレヒトも、ファレンティーンの舞台は「どのプレミアも見逃さなかったのである」(Reich. 268)。

では、その評価は？ 1939年から1940年に書かれた演劇論『真鍮買い』(Der Messingkauf)の中で、ミュンヘン大学の学生であった若い頃、第1次世界大戦が終わったあたりに最も影響を受けた人として、ブレヒトは、ビュヒナー (Georg Büchner. 1813-37)、ヴェーデキント (Frank Wedekind. 1864-1918) の2人の作家と並べて、この道化役者のファレンティーンを挙げている。

一番勉強になったのはビアホールに登場していた道化師ファレンティーンであった。彼は短いスケッチで手におえないサラリーマン、オーケストラの音楽家、雇い主を嫌い馬鹿にする写真家を演じた。雇い主は相手の、おなかにバンドを締め、低い声でしゃ

べる女道化師が演じた。(BFA. 22. 722)

また、1942年の6月上旬に、ルート・ベルラウ (Ruth Berlau) に宛てた手紙では、はっきりとこう述べている。

愛するルート、ファレンティーンの写真をどうもありがとう。ぼくにとってファレンティーンは、ほぼ、アイスラーにとってのシェーンベルクに当たるんだ。(BFA. 29. 239)

アイスラーとは、ブレヒトの数々の劇の音楽を担当した作曲家ハンス・アイスラー (Hanns Eisler. 1898-1962) で、無調音楽の創始者シェーンベルク (Arnold Schönberg. 1874-1951) の弟子であった。それと同じように、ファレンティーンは、アイスラーにとってシェーンベルクに当たる存在、まさに自分の師、今の自分があるのはこの人のお陰なのだという感謝の思いが、この文面から読み取れる。だから「一番勉強になったのは」という先の『真鍮買い』の表現も出てくるのである。

III

ここで、ブレヒトとファレンティーンとの関係について、現在分かっている事実を確認しておこう。

『ブレヒト・クロニクル』(Brecht Chronik)⁴で最初に出てくるのは、先にも挙げた、1920年3月半ばのドーラ・マンハイム宛ての手紙であるが、おそらくミュンヘン大学に行き始めた頃から頻繁にファレンティーンの舞台を訪れていたのだろう。

実際にファレンティーンの舞台にも登場している。無論ゲストでだが。1920年の5月31日には、『オーケストラリハーサル』にクラリネット奏者として出演 (Brecht Chronik. 90)、また、ファレンティーンと並んでクラリネットを吹いている例の有名な写真は、『10月祭』(Oktoberfestschau)に出演したとき (Schulte. 106)⁵のものである。

ブレヒト自身の作品に関しては、ファレンティーンと直接関わりがあるのは、『夜打つ太鼓』

(Trommeln in der Nacht)、『イングランドのエドワード2世の生涯』(Leben Eduards des Zweiten von England)の2つのドラマと、映画『床屋ミステリー譚』(Mysterien eines Frisiersalons)の3つの作品である。

まず、ブレヒトの出世作『夜打つ太鼓』である。1922年9月29日に、ミュンヘン小劇場で初演され、イェーリング(Herbert Jhering)の推薦でクライスト賞を受賞するきっかけになった作品であるが、この初演の翌日の真夜中近くに、「ブレヒトとファレンティーンによる2場の即興作品」、レビュー形式の政治的キャバレー『干しブドウ』(Die rote Zibebe)の初演が行われている。タイトルは『夜打つ太鼓』の酒場の名前にちなんだものである。

1部はブレヒト担当の「アブノーマル酒場の亭主」で、半円形に並んだシャワー室のような箱に、『夜打つ太鼓』で亭主グループ役を務めた狂言回し役の者が近づいてカーテンを開けると、それぞれが芸をやるという形で進んでいく。メンバーは豪華で、キャバレー詩人として名高いリングルナッツ(Joachim Ringelnatz. 1883-1934)、ファレンティーンの相方のリーズル・カールシュタットの薦めでヘッベル(Friedrich Hebbel. 1813-63)の『マグダラのマリア』(Maria Magdalena. 1844)を見たときと、ブレヒトの『夜打つ太鼓』を見に出かけたときの2回だけである。

初演だったか否かについては諸説あるが、とにかく、ファレンティーンはカールシュタットと連れ立って、ミュンヘン小劇場にやって来たのである。『夜打つ太鼓』初演の舞台でピカデリー・バーのボーイ、マンケを演じたクルト・ホルヴィッツ(Kurt Horwitz)の証言によると、舞台がはねたあと、ファレンティーンとブレヒトたち公演関係者は「マルカステン(厚化粧をした女)」という店で落ち合ったらしい。

1部はブレヒト担当の「アブノーマル酒場の亭主」で、半円形に並んだシャワー室のような箱に、『夜打つ太鼓』で亭主グループ役を務めた狂言回し役の者が近づいてカーテンを開けると、それぞれが芸をやるという形で進んでいく。メンバーは豪華で、キャバレー詩人として名高いリングルナッツ(Joachim Ringelnatz. 1883-1934)、ファレンティーンの相方のリーズル・カールシュタット、『夜打つ太鼓』の主な役者に、ブレヒト自身も登場する。別の回にはクラブント(Klabund. 1891-1928)も出演した。2部はファレンティーンを担当で、季節外れのクリスマスツリーをめぐる騒動を描いた自作の『クリスマスイブ』(Weihnachtsabend)を一座のもので演じた。無名に近いブレヒトと一緒に政治的キャバレーを上演して、エールを送ったわけで、ファレンティーンの好意が感じられる。

また、ファレンティーンとしたらきわめて珍しいことだが、『夜打つ太鼓』の上演も実際に見に来ている。というのも、ファレンティーンも有名な「演劇嫌い」で、劇は1年に1回、万霊節にしか見に行かなかった。しかも見るのは必ずエルンスト・ラウパッハ(Ernst Raupach. 1784-1852)の『粉屋とその子供』(Der Müller und sein Kind. 1835)であった。この劇は粉屋の娘と小僧の悲恋を描いたありきたりの大衆劇であったが、文学的な評価はともかく、ほぼ100年間上演し続けられていたわけで、根強い大衆の人気があった劇である。ファレンティーンも年に一度見に行っては涙を流し

ていた(Schulte. 46)。

いつも礼儀正しいブレヒトは、何も尋ねなかった。われわれもあえて聞かなかった。ファレンティーンは黙っていて、リーズル・カールシュタットは当惑してほほえんでいた。長い沈黙。長く間を空けないためにも、われわれは、ふだん必要な、経済的に許される飲み物とか少ない料理よりも長たらしい注文を出した。また長い沈黙。やっとファレンティーンが話した。「やはり、こういう現代的な劇では、上演の最後に誰か出てきて、人々の腕をつかんで、みんなもう終わりだよって言わなきゃいけないんだよ」。(Das Valentin Buch. 121)⁶

このホルヴィッツの回想はハンス・マイヤー(Hans Mayer)のファレンティーン論から孫引きしたが、この発言をマイヤーはこう解釈している。

この発言は、ブレヒトも含めて居合わせた人全員に、すぐに思い当たるところがあるものであった。決して何も芸術が分かっている者の言葉ではなかった。これはまさに劇の一番弱い点を突いていた。というのも、終わりの部分は、ブレヒトが、1955年の『戯曲集』の]前書き「初期作品を読み直してみて」(Bei Durchsicht meiner

このホルヴィッツの回想はハンス・マイヤー(Hans Mayer)のファレンティーン論から孫引きしたが、この発言をマイヤーはこう解釈している。

この発言は、ブレヒトも含めて居合わせた人全員に、すぐに思い当たるところがあるものであった。決して何も芸術が分かっている者の言葉ではなかった。これはまさに劇の一番弱い点を突いていた。というのも、終わりの部分は、ブレヒトが、1955年の『戯曲集』の]前書き「初期作品を読み直してみて」(Bei Durchsicht meiner

ersten Stücke) で述べているように、決してうまく決着がついていなかったからである。そこでは、出口のない状況、なるほど革命は断念して、中産階級的な考え方と折り合っていきたいと思っているが、しかし、それを良心の仮借なしには行えないという、非生産的でネガティブな状況が問題になっていたのだ。いろいろあったにもかかわらず、ブレヒトは、あの夜、ファレンティーンに分かってもらえたと思ったに違いない。(Das Valentin Buch. 121)

『夜打つ太鼓』の結末のところでは、帰還兵クラウグラーは革命を捨て別の男の子供を身ごもったアンナとベッドに入るのだが、そのあいまいさをファレンティーンは鋭く指摘し、ブレヒトにもうなずける点があったとマイヤーは取っているのである。

もう1つの劇、『イングランドのエドワード2世の生涯』は、ブレヒトがフォイトヴァンガーと共作したもので、ブレヒト自身が演出して1924年3月19日にミュンヘン小劇場で初演しているが、ファレンティーンは兵士のメイクに関して1つアドバイスをしている。

アウクスブルクの男が、半時間も闘いが繰り返される彼の最初の劇を上演したとき、彼はファレンティーンに兵士たちをどうしたらいいかを尋ねた。「兵士たちは戦いの中でどんな具合ですか」。ファレンティーンは、あまり考えもしないでこう答えた[「怖くて真っ白だったな」]⁷。(BFA. 22. 722)

『真鍮買い』の以前に紹介した箇所のようにこうある。ブレヒトはこのアドバイスに従って、兵士たちの顔を白くメイクしたのである。彼自身が、「演出家としては大衆喜劇役者カール・ファレンティーンに段取りをまねた」(BFA. 25. 388)と言っている通り、ブレヒトは、「何度もその舞台を見て、この並外れた大衆喜劇役者の作劇術、俳優術を学んだ」(Reich. 269)のである。

なお、『イングランドのエドワード2世の生涯』上演に関して、付随することを1つ付け

加えておこう。当初はプレミア公演を1923年12月に予定していたのだが、ブレヒトが演出にこるあまり、なかなか上演にこぎつけられなかった。実際、翌年の3月ようやく初演を迎えた。この遅れにミュンヘン小劇場は非常に困った。劇場経営から見て数ヶ月プレミア公演がないことになるので。そこで、ファレンティーン一座が飛び入りで興行することになった。1923年10月のことである。劇場支配人のオットー・ファルケンベルク (Otto Falkenberg) は、「これは小劇場にふさわしくない」(Texte von und über Karl Valentin. 291)⁸と、大いに不満だったらしいが、もちろんこの興行は大成功を収めた。「小劇場はファレンティーン劇場になった、さもなければ、ブレヒトはあれ以上リハーサルを繰り返すわけにはいかなかっただろう」(Texte von und über Karl Valentin. 291)とルドルフ・フランク (Rudolf Frank) は言っているが、ここでも、ファレンティーンは間接的にブレヒトを救ったのである。

ところで、このときファレンティーンは、1幕物をいくつか演じたが、その中に、季節外れにしかクリスマスツリーを飾れない貧しい家庭を描いた『クリスマスツリーの台』(Das Christbaumbrett)があった。政治的キャバレー『干しブドウ』で上演した『クリスマスイブ』に手を加えたものである。これに警察から「興行の枠を逸脱している」(BFA. 21. 628)とクレームがついた。これが上演された1923年10月といえば、「なに、1ドルが3兆マルクだって」(Reich. 240)とファレンティーンが驚いたように、インフレが一番激しかった頃で、ただし、翌11月の15日にはレンテンマルクが発行されてインフレは収束に向かうが、この時期に社会批判色が濃い作品を、しかも演芸場ではなく本物の劇場でやったのだから、警察もカチンときたのであろう。

この警察の動きに対して、ミュンヘンの知識人たちは、早速、「作家や学者はカール・ファレンティーンとその芸術をどう思っているか」(Wie Dichter und Gelehrte über Karl Valentin und seine Kunst urteilen!)というパンフレットを刊行して抗議した。ブレヒトもブロンネン (Arnolt Bronnen. 1895-1959) と連名で、ミュンヘン大学教授のフリッツ・シュトリヒ (Fritz

Strich) や法曹関係者などと並んで、ファレンティーン擁護の論陣を張った。

カール・ファレンティーンの劇『クリスマスツリーの台』は、文学的観点から見て、ファレンティーンのほかの劇と同様、一流の演劇作品である。

これは、その内部構造と演技の可能性からみて、あらゆる演劇芸術の原型を踏まえたものである。

非常に卓越した俳優であるファレンティーンが、ネストロイ⁹と同様、自らの劇の主役を自分自身で演ずるので、この時代と時代の人間たちとを喜劇の鏡に捉えたこれらの劇は特に味わい深いものとなっている。(BFA, 21. 102)

この抗議のパンフレットのせい、あるいは、翌11月に起こったヒトラーのミュンヘン一揆のせいでこんな小さな事件に人を割けなくなったためか、よく分からないが、この件は大事にいたらずにすんでいる。

最後に、1923年3月初め頃に作られた映画『床屋ミステリー譚』を見ておこう。ブレヒトもファレンティーンも、たとえば、ファレンティーンなどは1913年に映画を製作しているように、早くから映画に関心があったが、この両者が共同でアイデアを練り、ブレヒトとエンゲル(Erich Engel, 1891-1966)が2人で演出したのが『床屋ミステリー譚』である。

そもそもこんなことになったのは、闇商売で大金を稼いだ男が、一向にうだつが上がらない俳優である自分の弟を映画に出すために、いくらかかってもいいからとブレヒトとエンゲルに話しを持ち込んだのがきっかけであった(結局、出演させたかった弟は出られなかったのだが)。2人は映画の製作に関しては全くの素人であったが、チャンスとばかりに、仲間を誘って撮影に取りかかる。それがこの映画であった。

ぼくたちは……映画をどうやって作るのか知らなかった。夜中には椅子から転げ落ちるほど笑った。ほんとに素晴らしい幾晩かだった。こんなに楽しんだことは2度となかった。(Schulte, 107)

このエンゲルの言葉からも分かるように、モニターもカメラワークも下手、技術的にはなんらみるべきものはないが、ブレヒトたちが日頃やりたいと思っていたことをやり尽くしている、当時の彼らの考えを知るには、30分ほどの短編ではあるが、興味深い作品である。ここで、話しの筋を紹介しようと思うが、ファレンティーン、リーズル・カールシュタット以外に名前を挙げてあるのは、いずれも当時ブレヒトの劇に出ていた俳優である。他に、カロラ・ネーアー(Carola Neher)なども、ちょい役で出ている。無論サイレント映画である。

すごく長く髭の伸びた3人の客が順番を待っている床屋。しかし、ファレンティーン扮する床屋は、自分の気に入ったようにしかやらない。リーズル・カールシュタット扮する客のこぶをノミでとり、エルヴィン・ファーバー(Erwin Faber)扮する教授の髪型は希望とは違った中国風にして、教授を激怒させる。横の部屋では、教授に気があるブランディーネ・エービンガー(Blandine Ebinger)扮する床屋の助手が、教授の散髪中に、その恋人を椅子に縛り付けて、嫉妬心から痛めつけている。腹を立てた教授は床屋を出て喫茶店に入るが、変な髪形を隠すためにクルト・ホルヴィッツ扮する喫茶店の客の帽子を無断で拝借して、この男と決闘騒ぎになる。この客は決闘前に床屋によって髭の手入れをしてもらうが、その時に誤って首を切り落とされてしまう。床屋は接着剤とバンソウ膏で何とか首をくっつけるが、決闘に向かう男にピストルで撃たれる。最後の決闘の場面では、客のトランクに隠れてついてきた床屋の助手の女が、危うい瞬間に、首を接着剤とバンソウ膏でつないだだけの男の頭に釣り針を引っ掛けて、首を釣り上げ、好きな教授の命を助ける。首を釣り上げられた男が死ぬと同時に、ピストルで胸を撃たれて死んでいた床屋もよみがえって、映画はめでたしめでたしで終わる。

なんともグロテスクで不条理な筋立ての作品である。ただし、「カリガリ博士」のような無意識界をうかがわせる悪夢的な要素は全くない、ひたすらアクションまたアクションの映画である。傑作か否かはさておくとして、今見てもそんなに違和感はない。テレビのバラエティー番

組でやったとしてもおかしくない内容である。それは、おそらく、思いがけず映画を撮れることになって、「子供みたいに大喜びで新しいメディア」¹⁹の可能性に取り組んでいる嬉々とした姿勢が、現在に通じるところがあるためであろう。また、グロテスクで不条理な話しを、なまじ説明しようとせず、アクションに徹している点も、かえって現代的でいいと思う。

ただし、作られた当時は、ほとんど上演の機会もないうちにお蔵入りになってしまった。客演していたヴィーンの、偶然入った映画館で、よく似たプロットのアメリカのホラー映画を見たファレンティーンが、盗作騒ぎにまきこまれることを恐れて、上演を禁止したためである。20年代から30年代にかけて何度も盗作容疑で訴えられたブレヒトだけに、他の映画のプロットを少し拝借して自分の映画に作り変えるなんてことはいかにもありそうだし、何の罪の意識もなかったであろうが、神経質なところのあるファレンティーンだけに、そういう危険は冒せなかったのであろう。

IV

以上、ブレヒトが直接的にファレンティーンと関係した作品を取り上げてきたが、『夜打つ太鼓』と『イングランドのエドワード2世の生涯』に関しては、単に技術的な問題だけでなく興行面まで含めて、ファレンティーンが、まだ無名に近いブレヒトを何とか一人前にしようと、いたらぬ点を補って、有形無形に支援しようとしていたことが見て取れるだろう。

『夜打つ太鼓』の景気づけのためにブレヒトと共同で、レビュー『干しブドウ』を催し、「演劇嫌い」なのに公演に出かけたり、また、『イングランドのエドワード2世の生涯』のプレミア公演が遅れたときには、自らの一座の飛び入り公演でしのいでいる。ブレヒトは、若い頃に影響を受けた人として、ビュヒナー、ヴェーデキントと並べてファレンティーンを挙げたが、ビュヒナーは過去の人で、ヴェーデキントは1918年に急死していたから、実際に教えを受けたという意味で師と呼ぶにふさわしい存在はファレンティーンだけだったし、事実、ファレンティーン自身もその名に恥じない働きをし

てブレヒトを支えていたのである。

一方、映画『床屋ミステリー譚』は、アイデアはファレンティーンとブレヒトが共同で練ったとされるが、製作の事情が事情だけに、ファレンティーンの豊かな経験が生かされたであろう個々の場面はともかく、全体の流れは、そのとんでもないはちゃめちゃ振りから見ても演出を担当した2人の若者、ブレヒトとエンゲル、とりわけブレヒトの主導であったと思われる。ファレンティーンはあくまで後見役として、若い連中のやりたいようにやらせたのであろう。だから、エンゲルの「こんなに楽しんだことは2度となかった」という言葉になるのである。

その結果である映画を見てみると、きわめてグロテスクで不条理なアクション中心の仕上がりとなった。これが、おそらく、当時の彼らの生地そのもの、彼らの中核を形成していたものなのであろう。ファレンティーンは、とんでもない筋立てだが、別に嫌がりもせず主役を務めている。先に紹介したファレンティーン『オーケストラリハーサル』や『大火』などと極めて近いところがあるせいであろう。無論、これは必ずしも影響とは言えないかも知れない。しかし、少なくともブレヒトたちが同種の素地を持っていたということ、また、それがファレンティーンの舞台を見に通うことで顕在化したということは言えるだろう。影響とはこういうものかもしれないが、いずれにしても、まさに、この点で、ファレンティーンは、ブレヒトが「一番勉強になった」ものなのである。

これ以後2人は、この映画で「子供みたいに」やりたい放題にやり尽くしたことを、場を変えて、ドラマの世界で次々と実現させていくことになる。ファレンティーン体験をバックボーンに。ブレヒト作、エンゲル演出という形で。『ジャングル』(Im Dickicht. 23年5月初演)、『男は男だ』(Mann ist Mann)のベルリン初演(28年1月)、そして、歴史的な大成功を収めた1928年8月31日の『三文オペラ』(Die Dreigroschenoper)初演と、20年代のブレヒトの主要な作品は、2人のコンビでこなしていくことになる。

注

1. Lion Feuchtwanger: Erfolg. Drei Jahre Geschichte einer Provinz (Aufbau. 1976) Erfolg と略して、ページ数を続ける。
2. プレヒトの引用は、以下のテキストから行う。BFA と略して、巻数、ページ数を続ける。
Bertolt Brecht: Werke. Große kommentierte Berliner und Frankfurter Ausgabe. 30Bände in 32 Teilen und Registerband (Suhrkamp. 1988-1998)
3. Bernhard Reich: Im Wettlauf mit der Zeit. Erinnerungen aus fünf Jahrzehnten deutscher Theatergeschichte (Henschelverlag. 1970) Reich と略して、ページ数を続ける。
4. Werner Hecht (Hg.): Brecht Chronik 1898-1956 (Suhrkamp. 1997) Brecht Chronik と略して、ページ数を続ける。
5. Michael Schulte: Karl Valentin (Hoffmann und Campe. 1982) Schulte と略して、ページ数を続ける。
6. Michael Schulte (Hg.): Das Valentin-Buch. Von und über Karl Valentin in Texten und Bildern (Serie Piper Band 370) Das Valentin Buch と略して、ページ数を続ける。
7. BFA. 22. 1127 の注に従って補った。
8. Helmut Bachmair (Hg.): Kurzer Rede langer Sinn. Texte von und über Karl Valentin (Serie Piper Band 907) Texte von und über Karl Valentin と略して、ページ数を続ける。
9. ネストロイ (Johann Nestroy. 1801-62)。ウィーン民衆劇の傑作を多く書き、自ら主役を演じて大いに人気があった。劇作家兼俳優という共通点があるので、よくファレンティーンと比較される。
10. Roland Keller: Karl Valentin und seine Filme (Heyne Filmbibliothek Nr. 32/239) S. 76

Summary

Brecht mentioned three names who had a great influence on him when he was young. One of them was Karl Valentin. He was a famous German vaudevillian in the first half of the 20th century. Probably Brecht began to go to the vaudeville theater of Valentin shortly after he entered Munich University. He enjoyed Valentin's absurd and grotesque slapstick and learned theatrical techniques. Once or twice he went on the vaudeville stage as a guest player.

Valentin also took good care of young Brecht. He pointed out that "Trommeln in der Nacht" was weak at the ending when he went to see the drama with Liesl Karlstadt. In "Leben Eduards des Zweiten von England" he advised him on a make-up of the soldiers. He took an active part in the revue "Die rote Zibebe" in order to cheer an unknown young dramatist up.

Valentin and Brecht also made a short film titled "Mysterien eines Frisiersalons" together. It was an absurd and grotesque slapstick like Valentin's variety show. But in fact Valentin only played the leading character. Brecht made the film with Engel at his discretion. Brecht who was a Valentin fan could use the essence of his favorite vaudeville theater at will. Since then he continued to give plays with Engel during the twenties and attained success. What he mastered from Valentin made this success possible.